

盆栽の図像学

第十三回

三代歌川豊国《浅草 雷神門之光景》

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

三代歌川豊国《浅草 雷神門之光景》
大判錦絵三枚続 左：36.2×24.6cm 中：36.1×25.3cm 右：36.2×24.6cm
嘉永6年（1853）6月 版元／藤屋棟助 個人蔵

浮世絵師紹介
三代歌川豊国（さんだいうたがわとよくに）天明6（元治元年（1786）1864）
数多い浮世絵師のなかでも最大級の作例を残した江戸時代末期の絵師。はじめ歌川国貞と名乗っていたが、その後当時の人気絵師の一人であった師匠歌川豊国の名を継いだ（本人は二代目と名乗っていたが、実際は三代目であった）。庶民が鉢植を楽しむようになる時代に活躍した浮世絵師であり、多くの鉢植が彼の浮世絵版画に描きあらわされている。当時の鉢植・盆栽文化を知る上で、最も参考になる絵師と言える。



季節はめぐる

昨年はじまったこの連載の第一回では、梅や福寿草の鉢植が描かれた作品を紹介した。以降の連載のなかでは、そうした植物が四季の風物詩として庶民に親しまれている情景を紹介してきたが、絵を見る者に対して、描かれた植物が四季折々の季節感を演出し、伝える役割を果たしている。このことは、浮世絵版画などの「絵」によってはじめて表現できる、鉢植の植物ならではの働きと言えるものである。わたしたちが見てきた盆栽をめぐる浮世絵版画の季節も、一巡りして再び新たな年を迎えようとしている。年の瀬を控えるこの時季、今月の一枚は、初春の代名詞である梅や福寿草などが描かれた一枚、特に今回の場合、染付の鉢の姿も存分に楽しめる作品を紹介したい。

浅草雷神門前の縁日植木屋

まずは本作が、どういったところを描いているのか確認しておこう。題名に「浅草雷神門」と記されているとおり、この絵は浅草の浅草寺参道にある、雷神の顔を舞台としたものである。画面中央から右奥には、朱色の柱が鮮やかな門に網が張っており、中には雷神像の姿が一部ぞいでいる。そして地面は石畳となっており、画面右上には、おなじみの巨大な提灯が一部だけ描かれているのがわかるだろうか。提灯があることから画面右側が門の中央で、画面左にあらわされた鉢植の棚は、雷神の脇に設置されていることになる。

浅草寺の雷神のそばには、縁日のたびに植木屋が露店を連ねていたことが、江戸時代の地誌、いわば江戸のガイドブックである『江戸名所図会』（斎藤月岑編）などにも描かれていることからよく知られており、こうした情景は浮世絵版画にも数多くこのように描かれている。本作はそうした場を描いたものであり、縁日に集まった女性たちが前面に配し、そのうしろに豪華な染付鉢に植えられた種々の植物をあらわした画面構成となっているのである。

前面にあらわされた合計四名の女性たちはすべて留袖姿で、着物を厚手に着込み、正月前の買い物途中で立ち寄ったのであろうか、まるで全員顔見知りのように左にいる女性の方へ視線を向けている。その女性は植木屋の前に立ち、右手に牡丹唐草の文様と思われる染付の丸鉢に植えられた、二株の福寿草を掲げ持っているところである。そして女性らの視線の誘導によって注目が集まるこの女性と、まるで一体化するように後ろにいくつも並べられた鉢植の種類の豊富さに、俄然見る楽しみが募ってくるのではないだろうか。

染付鉢の展示会

こうした絵の構造に注意を払ったところで、棚上の鉢植について詳しく見てみよう。三段ないしは四段式の棚にディスプレイされている鉢植の、まずは右側下段には

袋式の染付鉢に梅が植えられ、その左には氷裂文の鉢に五葉松と思しき鉢植、そして瑠璃釉縞文に蘇鉄の鉢が並んでいる。次に中段奥から、染付鉢に同じく蘇鉄、平角鉢に福寿草の寄せ植え、そして口縁部にも文様が施された鉢に、模様を描いて立ち上がる梅、最後に素焼きの鉢の福寿草が並ぶ。上段奥からは、縞文の鉢が見え、次に六面描き分けと思われる鉢に椿が一輪花を咲かせている。隣には染付鉢の万年青、袋式氷裂文の鉢に松葉蘭、最後は非常に珍しい事例と言える雪の結晶、つまり雪華文様の鉢が置かれ、うねりをもつ幹の五葉松が並んでいる。女性の顔のすぐ脇という目立つ場所に配されていることも、この染付鉢に注目させるポイントとなるであろう。

次は棚の左側下段に移り、花の文様があらわされた口縁部の文様も明らかな染付鉢に、紅白の花を咲かせた梅の鉢植が置かれ、隣には牡丹唐草文の角鉢に松葉蘭、その左には瑠璃釉の鉢が一部だけのぞいでいる。この上の棚には、梅に隠された鉢が一点、そして松葉の文様が施された小型の染付鉢に万年青が植えられている。三段目には、右から小さな縞文の鉢が確認でき、隣には素焼きの鉢に赤い実をつけた植物が続き、さらに六面の鉢の蘇鉄が並ぶ。最後に最上段に移ると、右には波濤文と思われる瑠璃釉の袋式の鉢に不詳の植物、そして大きな縞文の鉢に古色のついた幹をもつ梅が、湾曲した枝を伸ばしている。その左にもやや小さな梅が瑠璃釉の鉢に植えられているのを確認できる。さらに棚上の鉢のほかにも、画面左下には白色と素焼きの鉢が重ねて置かれていたり、右下には根巻きの植物と剪定鉢も置かれている。

このスペースに、いま述べただけでも合計二三種の鉢植が置かれ、興味深いことには植物の種類は重複するが、鉢の種類や文様はそれぞれ異なるという、バラエティに富んだ描き分けがなされているのである。植木屋の並ぶ縁日に、女性たちが買い物に来たところといった日常の情景をあらわしているように見せながら、その実、本図の絵師の力点は、どうやらこうした鉢の描き分けにあるとも言えるような手の入れようなのである。

絵の中の絵を楽しむ

こうして見えてくる絵の要所は、絵を見る我々の見方のポイントともなってくる。この絵が縁日での女性たちの情景と単純に理解しただけでは物足りない、もう一歩突っ込んだ絵を見る楽しみを味わえるのである。それは入れ子の構造のように、絵の中にあらわされた植木屋の絵として、そのそれぞれ異なる色や形、そして種類の豊富さを楽しむ、まるですべての鉢を手に入れたかのような満足感を味わう、絵ならではの働きと言うことができるだろう。日常の光景のなかに巧みにカムフラージュされた、植木屋の実にさまざまな文様やかたちの豊富さをじっくりと読み取っていくことが、この絵を見るうえでの大きな魅力と言えるのである。（続く）

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知

■「新収蔵品展／美術コレクション名品選」

概要：浮世絵版画等の新収蔵資料の紹介と、当館所蔵のコレクションから、選び抜かれた名品を紹介する展示会を連続して開催します。

会期：新収蔵品展 平成24年1月6日(金)～2月1日(木)

美術コレクション名品選 2月10日(金)～3月14日(木)

(毎週木曜、2月17日(金)は休館)

■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091

著者プロフィール

田口文哉（たぐち・ふみや）

さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。

1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。